

# クリの穴貯蔵

渡 辺 誠

## 1. クリの貯蔵法

クリの実は、クルミ・トチおよびドングリ類とともに、稲作以前の縄文時代の重要な食料であり、稲作の始まった弥生時代以降も、保存食料として重要な位置を占めていた。そのための基本的な貯蔵方法は、俗にカチグリなどとよばれるものである。クリの実を一旦ゆでた後十分に乾燥させれば長期保存が可能であり、主に屋根裏や火棚の上に貯蔵しておく。

これに対して、短期の穴貯蔵がある。これは貯蔵に加えて、甘味を増やすことにも目的があり、砂糖以前の生活の知恵なのである。それもまた縄文時代以来の伝統を有しているが、研究上には若干の問題点が存在する。

実際の発掘においては、屋根裏貯蔵の確認はなかなか困難である。しかし一方で、貯蔵穴の確認はきわめて容易である。しかもそれらは乾燥した台地上に位置する場合と、低い低湿地に位置する場合とがある。いずれも短期貯蔵であることは共通するが、後者は特にトチやドングリ類などの、アク抜きを必要とするものに重点がある。ただしアク抜きを行うためではなく、乾燥させてしまうと皮むきやアク抜きが面倒になるからである。すなわち、穴貯蔵といっても目的には多様性があるのであり、それらを十分理解した上での調査記録が必要とされるのである。

## 2. クリの穴貯蔵の民俗事例—日本の場合—

クリの穴貯蔵の話はしばしば耳にするが、具体的な報告は以外に少ない。そこでまず筆者の直接観察した事例1例と、御教示を得た3例とを報告する（第1図）。

### 事例1）福島県田村郡大越町牧野字鍛冶屋の場合

1989年に大竹憲治氏などによって行われたところの、田村郡船引町堂平遺跡の発掘調査（大竹他1990）の折りに、隣町の現教育長の佐久間良雄先生の母親である、佐久間リイさん（明治37年生まれ）より同年10月22日にお話を伺い、再現して頂いた。

『昔はク리를 5 俵でも 6 俵でも拾った。カデ（飢饉）のための貯蔵は、ゆでて虫を殺し、ムシロの上などで日向でよく干して、屋根裏に囲っておいた。冬穴に入れるのは、9人もいた子

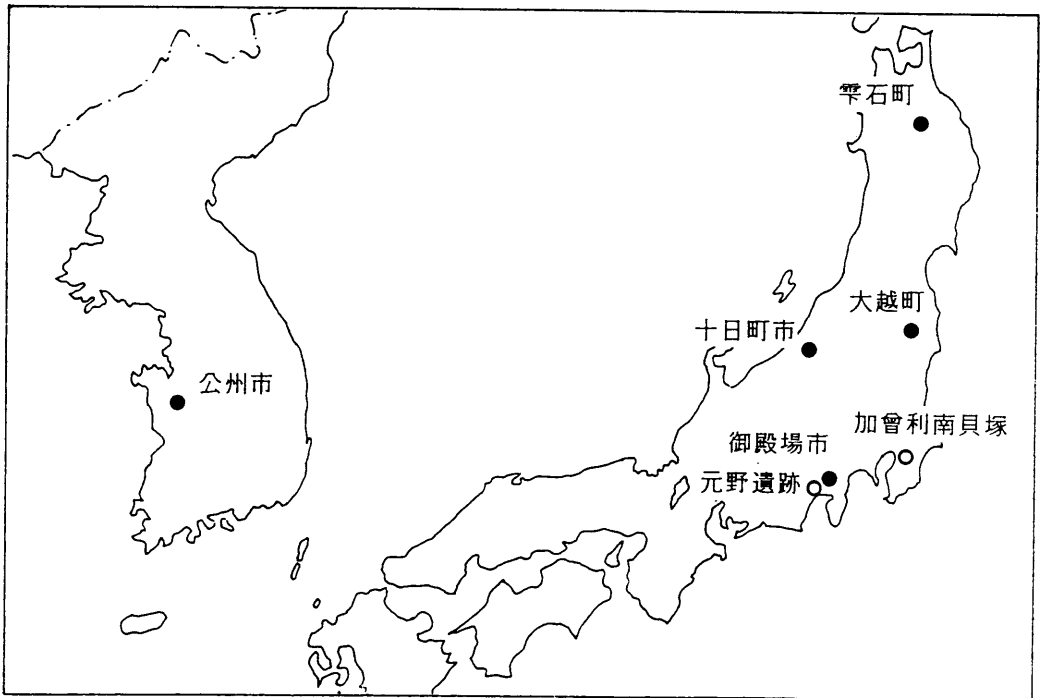


図1 事例調査地および関連遺跡分布図

供たちの食べ物にするためであった。昔は冬の甘いものは、クリかサツマイモしかなかった。これを生グリというが、母親は戦後までしていたし、自分でも娘のために、昨年までしていた。ただしこれは春の彼岸の頃までで、それを過ぎると味が悪くなるし、芽が出てしまう』。

『穴は土手の横の軟らかい岩に掘った。これをドムロという。昔5升も6升も入れた時は、身体が入るほどの大きさであった。今回は2升で少ないので、直径・深さとも約20センチである(写真1-1)。クリは砂に混ぜて入れた(同2)。そしてノネズミが入らないように、芝を切ってきて(同3)、口を塞ぐのである(同4)』。

『本来クリはうるかして、水を切って入れないと虫がつく。今回これをしなかったのが、正月までもつかどうか分からない』と言われたのが、とても印象的であった。

なお船引町でも、広く行われていたという。

#### 事例2) 新潟県十日町市尾崎の場合

十日町市博物館学芸員の高橋由美子氏によって、1991年9月25日に同地の池田良夫氏宅において調査された記録である。同氏の御厚意によって、取材記録および写真を提供して頂くことができた。

尾崎地区では、集落内の水はけの良い場所に穴を掘り、そのなかに貯蔵する場合と、砂を入れた箱に貯蔵する場合とがあり、ともに砂栗(スナックリ)とよばれている。

A: まず木箱に貯蔵する場合は、以前はリング箱などを用いたが、今回の場合は箱膳を転用



1. 穴を掘る



2. 砂と一緒にクリを入れる



3. 芝を切る



4. 芝で口を塞ぐ

写真1 福島県船引町の事例

した木箱であった。なかに川砂を敷きつめて、虫殺しをしたクリを入れる（写真2-1）。

B：穴貯蔵の場合は、①クリを一昼夜水に浸して虫殺しをした後、ザルにあげて乾す（同2）。②水はけの良い畑の一角に60×50cm、深さ40cm位の穴を掘り（同3）、川砂を厚さ5cm位に敷く（同4）。③そのなかにクリを入れて（同5）、川砂をかぶせて手でならず（同6）。④土をかぶせて穴をふせぐ（同7）。この時特に踏みつけたりはしない。⑤その上に長さ約3mの竹竿を立て、冬期に掘り出すための目印とする（同8）。ただし事例1のような、芝で口を塞ぐことはない。

以前は集落内でスナックリをする場所が決まっていた。また1軒当たり1斗位の貯蔵を行っていた。掘り出して食べる時期は正月～小正月で、味は甘くなるという。春先には若芽が出てくる。実際取り残しの実が発芽し、大きくなった木もある。

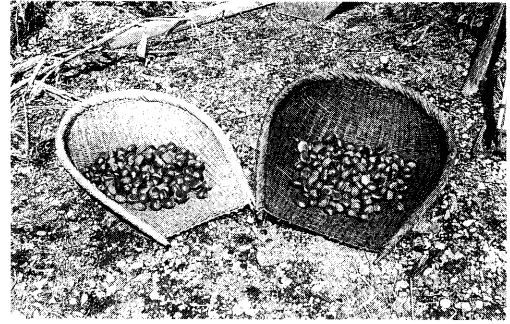
このスナックリを行う目的は、①クリの冬期保存、②甘くするため、③ネズミなどの食害予防などである。

#### 事例3）静岡県御殿場市の場合

山梨県立女子短期大学教授であった、故市川三次先生より頂いた記録である。1981年同市の江藤氏より取材されたものであるが、正確な地名・氏名を伺いそびれたのが残念である。



1. 木箱の場合



2. 虫殺しをして乾す



3. 穴を掘る



4. 砂を敷く



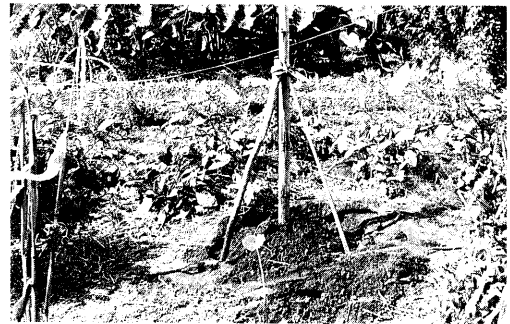
5. クリを入れる



6. 砂をかぶせてならず



7. 土をかぶせる



8. 竹竿をたてる

写真2 新潟県十日町市の事例

①実の選別：ちょっとでも腐り気味のものや、黒い怪しいシミのあるもの、粉のふいたものは、不良なのでとらない。怪しい個所をちょっとむいてみれば、内部に案外広く虫が蔓延しているものである。

②敷地の選定：日陰より日当りの良い場所がよい。人が歩く所がよい。虫が恐れるのかもしれない。

③貯蔵：三、四寸（四、五寸）の深さに、平らに所要面積だけ掘る。実を1個ずつ2cm位の間隔で並べる、穴が狭かったら移植ごてで拡張する。並べ終わったら、細かい砂を静かに振りかけて埋める。そしてチラチラ見える位の時に、土をかけながら手で押さえていく。クマザサなどを伐っておいて、これとクリとがつかないように、穴の周囲に入れておく。掘る時の目印である。さらに上から土を入れ、ならして踏みつけておく。ふだんこのあたりには、あまり水を流したり、掘ったりしない方がよい。こうしておけば、来春2、3月頃までは大丈夫であるが、それ以後暖かくなると芽が出る。

#### 事例4) 岩手県岩手郡雫石町黒沢川の場合

岩手県埋蔵文化財センター調査員の高橋與右衛門氏、および同氏の祖母である高橋ヨシノさん（明治28年生まれ）より、1982年2月8日に伺った話。

目的は冬期の貯蔵と甘味を増やすためである。しかし10年前までのことであった。

貯蔵穴を掘る場所は、屋敷内の畑である。直径2尺、深さ3尺位であった。

クリはまず虫食いを除き、水につけて虫殺しをする。それを川砂と一緒に穴に入れた。そして上に土盛りをし、さらに目印に棒をたてた。こうしておけば、雪のなくなる3月いっぱい保存できたが、それを過ぎると芽が出て、食べられなくなる。

#### 4 事例の比較検討

以上の4事例に共通する特徴は、すでに過去の習俗になっていること、日当りの良い乾燥した場所に穴を掘ること、虫殺しをした後に砂とともに埋めること、冬期のみの短期貯蔵であること、そして甘味を増やすことが目的であること、などである。

穴の大きさは、それぞれの必要に応じてまちまちである。

発掘資料との関係において、以上の点はいずれも重要な意味をもつ。そして特に事例1の芝をで口を塞ぐ点は、発掘所見の記載にあたり無視しがたいものがあるが、これについては最後に検討することにする。

### 3. クリの穴貯蔵の民族事例—韓国の場合—

新潟県下でスナグリとよばれるクリの穴貯蔵は、隣国の韓国にもみられることをかねてより知人から聞いていたが、なかなか自分の目で確認する機会がなかった。しかしついに1991年7月11日に、それを取材することができた。



写真3 韓国公州市市場の事例

写真4 千葉市加曾利貝塚のクリの貯蔵穴  
(縄文後期, 明治大学考古博物館提供)

場所は忠清南道公州市の市場である。ここではリングゴ箱に入れて売られていた(写真3)。300gで2000元であり、約30個あった。

日本の事例と異なり、松の木のクズのなかに入っていた。土では腐りやすく、またアメリカやカナダ産の松材も腐りやすいから駄目であるという。これは先祖の祭りにツヤツヤしたものを供えるためであるが、甘味も増えるという。実際7月になっていたのに、写真にみられるように、とりたてのようにツヤツヤしていた。入れる時は人間に無害な農薬をかけるので、虫はつかない。農薬のなかった時のことについては虫の食ったのは捨ててしまうだけということであった。

なお農家では、虫の食ったクリはまとめて製粉しジュースにする。また釜山市などではクリのかんジュースも売られていた。

本来穴に砂とともに貯蔵されていたのが、木クズのなかに入れられるようになったのは時代的な変化であろう。また市場で売られているのは、自家消費的な日本の場合と異なる点であるが、これは先祖の祭りのお供えものとしての性格によるものである。しかし甘味が増えるという点は共通しており、興味深い。

#### 4. 縄文時代のクリの穴貯蔵

クリははじめに記したように、縄文時代の重要な食料の一部であり、各地の遺跡から出土している(渡辺1975)。それらの出土状態には、屋根裏貯蔵を示唆している場合や、炉址内出土の場合などの他に、穴貯蔵の場合もみられる。

その代表的な例は、千葉市加曾利南貝塚において発掘されたものである(写真4)。しかしその詳細は記されておらず、写真に撮っている移植ごてからみて、直径約50、深さ約20cmと推定されるのみである。時期は後期であるが、細別時期は不明である。

もっともさかのぼる例は、静岡県沼津市元野遺跡の例である。調査者の瀬川裕一郎氏は次の

ように報告している(瀬川他1975)。貯蔵穴の輪郭は不鮮明で、クリの実の範囲から推定されている。

『遺構は平面が、楕円形を呈する漏斗状の断面を持つものであったと考えられる。大きさも平面最大巾で1 m前後、深さは50~60cmということではなかろうか。そうした「遺構」のなかに底にゆくほど量的には多かったが、だいたいまんべんなくおさめられていた。いわゆる「貯蔵」された状態である。「遺構」のなかからは、一片であるが土器片が発見されており、その土器片からこれらの植物遺体が茅山下層式土器の時代と近いものであるということが知れる。クリの数は推定もふくめて800~1000と考えられ、量的にも、また時期的にも他に類例を知らない。茅山下層式は早期末に位置する。

いずれも貯蔵穴内の土層の観察がみられず、砂の存在を確認することができない。

## 5. 記録上の問題点

貯蔵穴の使われ方は、クリの穴貯蔵に代表されるように多様性がある。それらを明確にするためには、まず第1に植物遺体の確認が指摘される。第2は、それらの穴貯蔵の必然性の有無の検討がある。

例えば沼津市元野遺跡の場合、多量のクリとともにミズキの種子も出土している。しかしこれらには食用価値はなく、貯蔵の意味がない。また福島県大越町の場合は、口を塞いだ芝を構成する雑草の、微細な種子の含まれる可能性が示唆されており、植物遺体の食用価値およびその穴貯蔵の必要性の有無は、厳格に評価する必要があることを示唆している。混入の危険性も含め、今後の重要な検討課題である。

第3に、問題意識を明確にした貯蔵穴内埋土の観察の必要性を指摘したい。これには地山の観察をも含めたい。貯蔵穴の底面が砂層的な層まで深く掘られている場合があり、これを偶然とみるが意図的なものとみるかも、今後の検討課題である。

## 謝 辞

本稿をまとめるに際しては多くの方々の御協力を仰いだ。末尾ながらそれらの方々のお名前を明記して、深謝の意を表する次第である(敬称略)。

故市川三次、大竹憲治、金建洙、後藤和民、佐久間リイ、佐久間良雄、瀬川裕一郎、高橋由美子、故高橋ヨシノ、高橋與右衛門、戸沢充則、十日町市博物館、明治大学考古博物館。

## 引用文献目録

- 大竹憲治他、1990：船引・堂平遺跡。船引町文化財調査報告。8。  
杉原荘介編、1976：加曾利南貝塚。中央公論美術出版。  
瀬川裕一郎他、1975：元野遺跡発掘調査報告書。沼津市文化財調査報告。8。  
渡辺 誠、1975：縄文時代の植物食。雄山閣考古学選書。13。